



## 社会がいかに変わろうとも 普遍のものもあるのでは…

校長 宮 居 伝

新しい時代「令和」を迎えた今年度も、残すところ1か月あまりとなりました。そして、子どもたち一人ひとりの成長、育ちを振り返る時期ともなりました。

ところで、6年間の子どもたちの育ちを、たいへん大まかな言い方ではありますが

「足場を求める」	1年生
「たしかめる」	2年生
「自分はいい子」	3年生
「待ってられない」	4年生
「考える」	5年生
「こころざす」	6年生



技（短縄跳び）に挑戦

と言われることがあります。



大縄大会頑張っています

小学校を卒業されたお子様がおられる方には、何となくイメージしていただけるのではないかとも思います。個々の子どもの成長を、一概にひとくくりでは言えませんが、うまく表現したものだとも思います。

そして、この様子を、もう少し詳しく書き表した小冊子がありましたので紹介します。（少し難しい言葉もありますが、その概要は次のような内容です。）

就学前での生活から、小学校に入学し、学校という社会にある程度の足場を築く1年生から、周囲の自然や社会、その他の現象を理解するため、自分からだて働きかけ、その働きのなかで自分なりに解釈し、ある種の意味づけをする2年生。

そして迎える3年生から4年生。この時期は人生の動乱期であって、最も活気に満ち、自信にあふれ、他を少しも感ずることなく、自分をむき出しにして行動する時である。（手に負えないこともあり、いたずら盛りで、最も世話のやける学年でもある。）

4年生は、ひとつの転機をもたらず時期。したがって、4年生は以後の成長の方向を決定する分岐点

であるという意味において重視したい学年である。

5年生は、4年生の動乱期を脱し、「自己統一」に向かう段階である。この「自己統一の仕方」のカギを握るのが5年生の大きな特徴と言える。

自己の内面に向かって目を開き、自分自身を問題にすることが、ますます深くなっていく6年生。単に、自分一人に対してではなく、社会という集団における自己を問題にするようになる。

5年生の「自己統一」がほんとうの意味で完成し、自分自身の考えを育て、人生における清純な立志の第一段階を温かく見守ること、言い換えれば、望ましい「世界観の確立」ということが6年生の焦点となる。

この研究小冊子にもありますように、子どもの成長は9～10歳の時期に大きく転換します。これまでは具体的な「もの」や「数」以外を認識するのが難しかった子どもたちが、抽象的な概念を理解し始めます。また、この時期には、集団のなかで小さないざこざを経験しながら、人との適度な距離感を覚え接していくようになってきます。いわゆる「10歳の壁」「9歳の壁」「小4の壁」と言われる大切な時期となります。

一方、子どもたちが過ごしている毎日（現実）は、ソサエティ5.0（Society5.0）の言葉に代表されるように、AIや急激な情報化などにより先行き不透明な時代へと進んでいます。また、「デジタルネイティブ世代」とも呼ばれるように、生まれた時から、家庭内にはIT機器があるのが当たり前の日常生活となっています。（最近では、このような環境の変化が急速化し、ネットに関わるトラブルが低年齢化しているのも危惧されるようです。）

しかしながら、社会がいかに変わろうとも、人が育っていく（通っていく）成長の道筋、通っていかねばならない、経験しておくべき成長の過程があるように思います。

社会の変化とともに、この道筋との表だった出会い方は変わっていくにしても、人と交わり社会のなかで生きていくための術や心地よさ、自他ともに育っていく社会を生きていくためには、普遍のものがあるようにも感じています。

一年の振り返りをしている今、このような視点にも立ちながら、本校の教育活動を見つめ直してみたいと考えています。

子どもたちの育ちは連続です。上記のような視点を、時々、思い起こしお子様に接していただければ幸いです。全てがこの通りであるとは思いませんが、私たち教職員や保護者のみなさまをはじめ大人が、子どもたちへの教育、とりわけ育ちや生き方を学ばせる時の参考にと紹介させていただきました。私自身も今一度…とっております。



雪遊びを楽しむ子どもたち